

# 「川越とサツマイモ」企画展&「甘藷と三芳」特別展レポート

～川越いもの歴史を中心とした文献資料の展示～

川越いも友の会 事務局長

やま だ えい じ  
山 田 英 次

## 1 はじめに～紅赤発見120年記念～

2018年は、伝統品種の「紅赤発見120年」の記念年であった。前年の2017年より、その周知のための記念事業をスタートしたが、今回の事業の特色は、現在、紅赤の栽培を行っている「川越市・さいたま市・三芳町」の2市1町の関係機関と団体が連携し、お互いの記念事業イベントの事業効果を上げ、紅赤生産保存につなげることであった（紅赤120年記念事業の主導は「川越いも友の会」と「川越サツマイモ商品振興会」が行った）。広く連携するために、農政の各行政担当者や生産団体、紅赤利用業者、文化団体の他、教育委員会関係（図書館、博物館など）もメンバーに入ってもらった。そのメンバーによる2市1町の連絡会を開催し、具体的に情報の交換を行い、互いの連携PRと共に、イベント同士がぶ

つからないよう配慮した。

そのような中で、川越市立博物館と三芳町立歴史民俗資料館には、紅赤を柱とした川越いもの歴史を、お互いに連携をとりながら「企画展」という形で、それぞれの地域の特徴を活かしつつ開催してもらった。

## 2 川越市立博物館「川越とサツマイモ」企画展（10月13日～11月25日）

川越市立博物館は、観光地（時の鐘や蔵造りの町並み）の近くの旧川越城の跡地にあり、城下町の歴史や文化を主体に常設展示を行っている。そのため、多くの観光客も見学に訪れる施設となっている。（川越市郭町2丁目30-1 電話049-222-5399）

今から10年前の平成20年6月に、民間の「いも膳」が運営していた「サツマイモ資



サツマイモ企画展の図録（左：川越市）と解説シート（右：三芳町）



川越市立博物館外観と「サツマイモ展」の看板

料館」(当時：井上浩館長)が閉館した時、700点以上の甘藷関係資料が同館に移管された。その後、その資料を主体とした収蔵展「サツマイモ」が平成21年に開かれ、一部の資料が常設展コーナーに「昔の芋せんべい作り機具」と共に展示されている。

今回の展示を担当した同館の峯岸太郎副主幹は、文献資料を活用して「川越いもの歴史的な流れ(江戸～明治・大正～昭和～現代)がわかるように展示の構成を考えた」という。その構成は次の5章たてとなつて時代ごとに分け、展示された。

(序) サツマイモの伝来と青木昆陽の功績

・・・青木昆陽肖像画、蕃藷考、昆陽に関する碑(写真パネル)など14点

(第1章) 江戸の焼きいも人気と川越いも

・・・古文書に記された焼きいも、浮世絵などに描かれた焼きいもなど15点

・・・川越いもの生産と広がりとして諸国産物の番付表、新河岸川の舟運による甘藷輸送の受払帳など25点

(第2章) 埼玉のサツマイモ作りの貢献者たち

・・・川越いもの作り初め「吉田弥右衛門」、現代に通じる甘藷栽培法を確

立「赤沢仁兵衛」、紅赤の発見者「山田いち」、紅赤の普及に尽力「吉岡三喜蔵」の資料16点

(第3章) 川越、いも菓子の世界

・・・川越独自の伝統いも菓子「いもせんべい」作りの機具類など17点

(第4章) 川越のいも文化

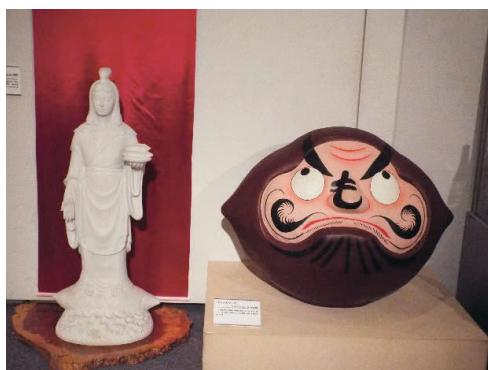
・・・元サツマイモ資料館の展示物や川越いも友の会関係者の資料など31点

期間中の11月11日(日)には、「外国から来たサツマイモと川越」(講師：ドゥエル・ベリ氏)と題した講演会も同館視聴覚ホールで行われ、約60名の参加者のもと、一般にはあまり知られていないアメリカ等のサツマイモ事情が話された。

また、それに先立つ11月9日の午後、沖縄のサツマイモ文化団体「沖縄いもづるの会」(伊波勝雄氏・神山吉朗氏・石川護氏)3名、茨城県の干し芋文化研究者(先崎千尋氏)と同生産者(木名瀬一氏)2名、川越いも文化研究者(井上浩氏・ドゥエル氏・山田)3名が同館に集まり、展示を見ながら「サツマイモ文化研究談義」に花を咲かせ、今後の取組み課題について論じ合った。



紅赤発見者・山田いちと普及者・吉岡三喜蔵の肖像画(中央には、当時の「富民賞の新聞記事」も展示)



川越独自の「いも美神(大理石130cm)」像と「いも大ダルマ」

### 3 三芳町立歴史民俗資料館「甘藷と三芳」 特別展（9月14日～11月25日）

三芳町立歴史民俗資料館は、東武東上線「みずほ台駅」西口より徒歩25分にあり、特に武蔵野台地を開拓し暮らした人々に焦点を当て、その歴史（三富新田開発など）と文化に関する常設展示を行っている。サツマイモ関係では、本場「川越いも」のひと昔前の伝統的な栽培法（当時は紅赤）を展示している。（入間郡三芳町大字竹間沢877 電話049-258-6655）



「甘藷と三芳」展示風景（三芳町立歴史民俗資料館）

また同館では、6年前より、毎年、さつまいも大学講座を開催し、町民を対象に座学・見学・実習を行い、地元のサツマイモ文化の継承に努めているほか、20年以上前より、平地林の落ち葉を使用して伝統的な「苗床づくり」を行い、種芋を伏せ込み、イモ苗づくりを行っている。失われつつある伝統的な農法を文化として伝えていこうとする試みは評価に値すべきことである。

今回の特別展を企画担当した岡野賢人学芸員は、展示の内容について「川越いもの生産と、江戸への流通を中心に展示を行いました。特に江戸期と大正期の栽培法（苗床構造）の対比や、さらに明治期の甘藷仕

切状（納品・受渡の証明）をもとに、三芳のイモ農家が、新河岸川の船問屋を通して、東京のどの甘藷問屋と取引したか、その道筋をなるべく明らかにしました」という。

展示は、文献が主体だが、「サツマイモの伝播」からはじまり「関東への伝播」、「三芳への伝播」と続き、三芳村農会による『甘藷栽培法』（大正2年）の栽培解説を、江戸期の『蕃藷考』と対比して行っていた。



江戸期「蕃藷考」と大正期「甘藷栽培法」の苗床の対比図

さらに「サツマイモの流通」と題して、新河岸川の舟運による、明治期の地元農家と船問屋、東京の薩摩芋商人との取引状況を、残された仕切状をもとに解説されていた。大正期に栽培されていた古い在来品種名も各文献に見ることができ、川越地方のサツマイモ栽培文化を知ることのできる展示であった。

同館では、明治期の三芳村農会に関する甘藷文献類を多く所蔵し、それらを一部見せていただいたが、岡野学芸員によると、三芳の古い品種文化についてはまだ追究すべき課題があるため、展示会後も取り組んでいきたいということであった。